

青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光

羽島市 乙部 孝順

表題は阿弥陀経で浄土の情景を表す中に出てくる一節です。池に咲く蓮の花が光り輝きしかも互いに他の蓮の色を損なうことなく、美しく調和をして蓮池に咲き誇っている浄土の様子を表しています。この一節は、色々に解釈できると思いますが、蓮池を一つの家族と考えれば、父親・母親・子供たちが、それぞれ置かれた場所で光輝き、しかも他を傷つけることのない幸せな家族の姿を表しているのではないのでしょうか。或いは、蓮池を地域社会と考えれば、各々の家族が、それぞれの色で光り輝き、他の家族を羨んだり見下したりしない幸せな地域社会を表しているとも解釈出来ます。日々の生活を幸せと思えるには、他を羨ましく思ったり、見下したりしないことだと思います。差別する心が、己を不幸にし、他を苦しめるものになっているのではないのでしょうか。お釈迦様は、「心は人を仏に、また畜生にする。迷って鬼となり、さとして仏と成るのもみな、この心のしわざである。」と教えています。

佐賀県で歌いつがれてきた念仏唱歌に「泣いて生きるも五十年。笑って生きるも五十年。泣いて暮らすも笑うにも心ひとつの置きどころ」というのがあります。泣いて生きる、すなわち地獄の日々を送るか、笑って生きる、すなわち極楽の日々を送るかは、心のおきどころ、すなわちものの見方考え方による、とお釈迦様は教えているのです。差別の心を生まないためには、人と会うとき、優しい眼差しで、穏やかな顔で、優しい言葉で接し、感謝の言葉を忘れない。また働くのは、己のためだけでなく、人のため・社会のために働いていることを、常に心がけておく事が大切であると、お釈迦様教えています。日々の小さな努力の積み重ねが、私の人生を幸福にするし不幸にもするのです。極楽（浄土）は、遠くにあるのではなく、毎日の暮らしの足下にあるのではないのでしょうか。